

現代の中国における女性と職業

——自己実現とストレスをめぐって——

余 若 梅

序 論

人類の長い歴史において、中国女性は社会生活の面での地位をほとんど失い、男性に隷属する立場に陥ってしまった。しかし、現代の中国では、女性はいろいろな束縛から解放され、その地位は次第に回復し、社会の中で一定の地位を占めるようになった。

ところで、現代文明の中では、女性の社会的地位が絶えず高まっている一方で、その社会から受けるストレスも増えている。特に、パートタイム¹⁾の女性にとっては、そのストレスが大きい。彼女たちは仕事のために社会の様々なストレスに耐えると同時に、家庭におけるストレスにも耐えなければならない。

中国はまだ伝統的農業国から商業国への発展途上にある国家である。社会の発展に伴って、女性が家庭と職業との間で葛藤を体験するのは必然的であるといえる。現代中国の職業女性には、普遍的に緊張した心理状態が存在することになった。このような心理は主に環境の変化によるものであり、このような焦燥感²⁾は女性にストレスをもたらしたのである。

職業女性にとって、仕事と家庭の狭間で悩み、葛藤に耐えなければならない年齢はおよそ25歳から40歳の間で、出産年齢にあたる。この時期、職業女性は仕事に関しては黄金期なのであり、家庭においても最も重要な時期である。両面ともに重要な年齢であると同時に、最大の悩みの時期でもある。そして、職業女性は身体面でストレスを受けるだけでなく、心理面でも大きいストレスを受けている。

女性が受けるストレスは男性よりも大きいのは明らかで、その重要な原因は地位が高まることに伴って社会から受けるストレスと、このようなストレスの解消がうまくいかないことによると思われる。職業女性が受けるストレスは主に社会と家庭からであり、その二者のストレスは互いに関連したものである。

本論文は主に、パートタイムの職業女性が仕事のために被ったストレス、および家庭面の問題を論述する。

第一章 中国における女性の歴史的変遷

第一節 女性の職業

中国では、家事を主とする数千年の伝統的家庭生活において、女性に自由と権利はなかった。1949年以後の中国社会では、女性は尊敬されているが、現実の社会は職業女性に様々な要求を出し、女性は色々な社会的矛盾に直面して、各種の社会問題を起こしている。そこで、パートタイムの職業女性の職業と生活の矛盾を研究し、その原因と女性への影響を分析したい。それに基づいて、これらの矛盾を解決する道を見出し、職業女性が健全な人生を送るための条件を探る。

「中国の数千年に渡る伝統の中では、社会は女性の身に対して一つまた一つと、戒律と圧迫と束縛という重い手かせ、足かせを加えてきた。1949年以前の中国社会では、女性には本当の人身の自由がなく、ずっと付属品として社会の中で生活してきた。自由がなく、ただ生殖の道具でしかなかった³⁾と中国の政治家の宋慶齡（孫文の妻）は1953年に述べている。

1949年以前の中国社会では、男性が自分の社会的地位と財産を恒久的に保持するため、嫡出の後継者が要求され、封建制度⁴⁾がそれに応じて現れた。このような制度で嫡出の相続人を確保する前提として、男性に対してはその人格と尊厳への尊敬を、女性に対しては閉鎖的態度をとるようになった。封建制度の確立によって、女性は家庭内労働だけに携わり、社会から離れ、社会とのつながりが途絶えた。統治者の男尊女卑の宣伝により、「男性は外、女性は内」の両性分業が形成され、周時代⁵⁾には初めて規則で定められた。家庭内外の仕事においては、男性が外、女性が内で、女

性は外へ出ることは許されなかった。この分業制度では男性は政治、軍事、外交、社会生産などの公事、外事をし、女性は私事、内事だけに限られ、政治などに携わることはできなかった。「男性は外、女性は内」という制度のもとで、女性は政治参加権だけでなく、財産の所有権、支配権、さらに自由も奪われ、家庭に束縛され、男性の家族に奉仕し、男性に依存することとなった。

封建制度の専制秩序と分業様式を強めるために、統治者は女性道徳標準、即ち貞専従順を作り、女性の義務を定めた。これは男性が女性を支配するための一方的、かつ封建制度を維持する表面的な道徳である。しかし、この道徳により、従順は女性の精神内部にまでも浸透し、穏やかに男性の利益を守ることとなり、女性にとっては貞専従順を保証する根本的な道徳となった。

封建制度の元で生活する女性が、男性の苗字、血縁、財産、生命などを継承する道具であり、長い歴史で形成された「女性は内」の伝統も女性を束縛する分業様式に過ぎないことは明らかである。この分業様式の状況下では、女性は権益と機会を失い、自由が奪われ、もっぱら家事に従事するだけで、各分野で男性と同様に労働することができなくなった。そして自分自身の社会的価値を直接的に体现できず、男性に依存し、「妻は夫で尊くなり、母は息子で尊くなる」ことを期待するしかなくなった。自由と権利を喪失して、男性の望むとおりの人格を受動的に養成するしか仕方なかった。

いうまでもなく、「男性は外、女性は内」の分業様式では男性の最大限の社会的価値は女性の社会的価値の剥奪によって実現される。これは単なる家庭の分業だけでなく、女性の人間としての権益、女性の発展、女性の社会的地位にかかわる大きな問題である。

1949年に中華人民共和国が成立し、政治革命の成功に伴い、女性解放運動の幕が開いた。国は法律や行政などの一連の手段を打ち出し、封建制度などの不平等的な規範を徹底的に廃止して、社会主義の男女平等が実現することになった。1949年以後、中国女性は権益の享有と平等な法律的地位の獲得によって、国家の主人公となった。中国女性は一瞬のうち自由と権利を獲得したといわれている。彼女たちの政治的権利、社会的待遇、家庭での地位、就職状況などは大多数の欧米国家の女性がなかなかえられないものであった。父に従わなくても、夫に従わなくても、息子に従わなくても、自分のことを自分の意志で決め、自分が

運命の主人となり、社会に出ても、男性と同じように独立した人格を持つ人間なのである。この社会も男性だけが治める天下だけでなく、男女ともに天下の主人となり、社会を共同で治めることになった。

1949年の《中国政治協商会議共同綱領》で、女性を束縛する封建制度の終結を宣告し、1950年第一部《婚姻法》で女性は婚姻自主の権利を勝ち取り、さらに、1954年に発布された第一部《中華人民共和国憲法》によって、法律上の男女平等の権利と政治権を確立し、各法規は詳細に女性の権益を規定、保障し、十分に政治権を享受してもらおうと同時に、女性に平等な就職権と同職同給を保障したのである。これらの措置は女性の発展を促進したが、封建制度とは鮮明に対照的である。法律の上で、男女平等の法律が制定されることにより、女性はあらゆる職種への就業の権利を得て、経済的独立が可能となり、教育の普及によりさらに多くの人に教育を受ける機会を獲得させた。

中国の女性は社会的労働に参加し、政府の政策決定には大きな役割を果たした。そして、女性の社会的地位と伝統的役割は改善された。中国の歴史上初めて、法律上女性が社会生活に参加すること、教育を受け、労働に参加すること、選挙権、平等に財産を所有することの権利を承認した。この法律制定自体が男尊女卑に対して、挑戦するものである。

しかし、積極的な面を肯定すると同時に激変する事象に隠れている問題も認識しなければならない。1980年代から、女性は男性と同じように激しい労働をし、男性以上の精力と代価を費やしてきた。しかし、女性は一種の新たな窮境に陥ったことに気づき、また、男性中心の文化や価値体系に対して、女性の側から問題を提起した。女性は自由と平等を追求するにあたって、女性の立場に立ち、女性の心身の健康と進歩発展に役立つ女性の文化や価値体系を確立しなければならない。これが激変の過程に起こった問題、広汎な女性が探求しなければならない問題でもある。

第二節 学歴と教育

社会の経済の進歩と教育事業の急速な発展により、中国の女性の教育の権利を受ける機会と教育水準は、極めて大きく向上した。表1の男女の学歴に関する調査結果を見ていきたい。

1982年には、大学以上の学歴を有する女性の対人口比率は0.32%、高校程度の学歴を持つ女性の対人口比率は5.22%であった。初級中学程度の学歴を持つ女性の対人口比率は13.53%で、小学校程度の学歴を

表1 女性の学歴と男性の学歴の対人口比率

年代	大学		高校		初中		小学		小学以下	
	男性 (%)	女性 (%)	男性 (%)	女性 (%)	男性 (%)	女性 (%)	男性 (%)	女性 (%)	男性 (%)	女性 (%)
1982年	0.86	0.32	7.89	5.22	21.57	13.53	39.38	30.85	30.30	50.08
1990年	1.88	0.87	9.36	6.40	27.28	18.92	37.66	36.44	23.82	37.37
1995年	2.85	1.61	10.63	7.59	34.74	25.49	42.57	42.32	9.21	22.99

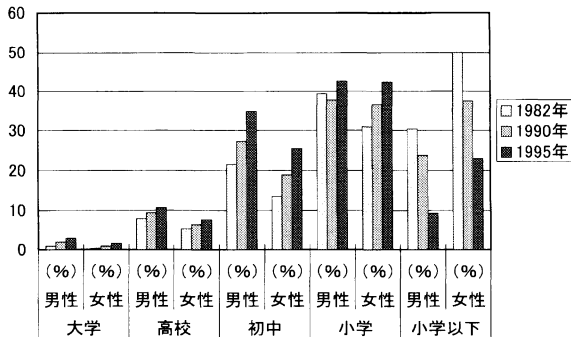


図1 女性の学歴と男性の学歴の対人口比率
(参考資料：崔鳳垣，張琪，『婦女社会地位评价指標体系研究』より作成，中国婦女出版社，2003年，104頁)

持つ女性の対人口比率は30.85%だった。1990年に実施された調査結果によると、大学以上の学歴を有する女性の対人口比率は0.87%で1982年より0.55%増え、高校程度の学歴を持つ女性の対人口比率は6.40%とやはり1.18%増えた。初級中学程度の学歴を持つ女性の対人口比率は18.92%で5.39%増え、小学校程度の学歴を持つ女性の対人口比率は36.44%と5.59%増えている。1995年に実施された調査結果によると、大学以上の学歴を有する女性の対人口比率は1.61%と5年間で0.74%増え、高校程度の学歴を持つ女性の対人口比率は7.59%と1.19%増えている。この数年の変化を通じて、各水準の学歴における女性の対人口比率は増加したのがわかる⁶⁾。つまり、1982年から1995年にかけて、女性の教育程度が高まっていることは確かである。

さらに、表2の技術発明賞を例にとって、女性の科学技術者の貢献について考えてみよう。1978年の技術発明賞を得た総人数116人のうち、女性はわずか8人であり、受賞者の6.9%にすぎなかった。1985年は受賞者832人中、女性は79人、受賞者総数の9.5%、1992年女性受賞者は13.6%にふえ、1993年には、女性は97人で、受賞者総数の13.7%であった。1995年も女性受賞者はおよそ13.6%強であり、これは解放前の中国の女性の非識字率が98%であったことを考慮すれば、本質的な飛躍であるといえる⁷⁾。

表2 技術発明賞受賞者の男女比率

年代	受賞者総数	男性受賞者数 (総数に対する比率%)	女性受賞者数 (総数に対する比率%)
1978年	116人	(108人) 93.1%	8人 6.9%
1985年	832人	(753人) 90.5%	79人 9.5%
1992年	(970人)	(838人) 86.4%	132人 13.6%
1993年	708人	(611人) 86.3%	97人 13.7%
1995年	(220人)	(190人) 86.4%	30人 13.6%

()内は筆者の計算により加える

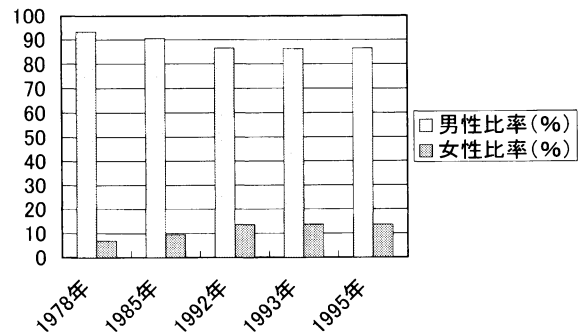


図2 技術発明賞受賞者の男女比率
(参考資料：崔鳳垣，張琪，『婦女社会地位评价指標体系研究』より作成，中国婦女出版社，2003年，112頁)

女性は経済、政治、外交、科学技術、文化、体育などの各分野で、この30年ほどの間に水準も向上し、多くの優秀な人材を輩出し、目覚ましい貢献をしたといえる。しかし、ステレオタイプとして、女性は感情的で、男性ほど挑戦的ではなく、創造性に乏しく、決断力がないと思われがちである。これらの偏見とそれに基づく差別により、女性が様々な職業に適していないことの原因とされ、たとえ採用されても、評価の低いレベルの職種に限定される傾向がある。この偏見によって、女性が不公平な待遇を受け、発展を妨げられ、各分野での女性高位管理職の出現の低下が生じている現状について次節で考察してみたい。

第三節 女性と就業

1949年中華人民共和国が建国されたが、政府は労働力不足の問題を解決するため、そしてまた女性解放という政治目標を実現するために、都市と農村の女性を幅広く社会的労働に動員した。それ以降、女性の就業率は高く、世界的に見ても高水準である。たとえば、「82年の女性就業者は全就業者の43.7%を占め、90年は45%であった⁸⁾と指摘されており、解放前の1940年の10才以上の女性が正式に職業をもっていた率(およそ1~9%)と比べて、驚異的な高さである

ことがわかるであろう。しかし、労働力の半数近くを女性が占める状況になりつつあるが、「職業階層のランクが低いという特徴」¹⁾が見い出せることは重要である。

まず、表3-1において都市の就業者の男女比率を見てみたい。

1949年の都市女性就業者の総数は60.0万人で、都市就業者総数¹⁰⁾の7.50%と1割以下であった。1952年には都市女性就業者の総数は184.8万人となり、都市就業者の総数の11.69%を占めた。そして、1957年

表3-1 都市における男性と女性の就業者比率

年代	就業者総数(万人)	男性就業者(万人)	女性就業者(万人)	女性就業者の比率(%)
1949年	800.00	740.00	60.00	7.50
1952年	1580.09	1395.29	184.80	11.69
1957年	1314.10	985.50	328.60	25.00

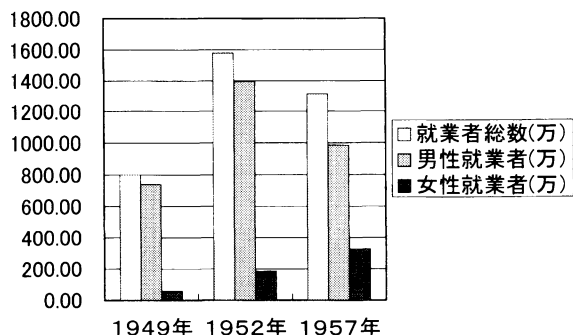


図3-1 都市における男性と女性の就業者比率
(参考資料：杜芳琴，王向賢，『婦女与社会性別研究在中国 1987-2003』より作成，天津人民出版社，2003年，345頁)

表3-2 第一次産業女性就業者における農村と都市の比率

年代	農村比率(%)	都市比率(%)
1952年	60.00	40.00
1958年	90.00	10.00

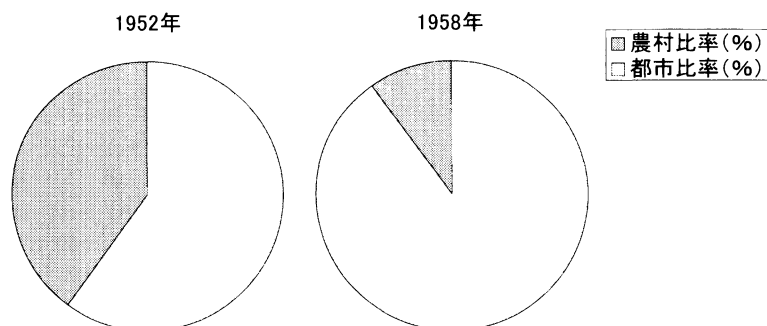


図3-2 第一次産業女性就業者における農村と都市の比率
(参考資料：杜芳琴，王向賢，『婦女与社会性別研究在中国 1987-2003』より作成，天津人民出版社，2003年，345頁)

には328.6万人となり、就業者の総数の25.00%まで増加した¹¹⁾。

次に女性の労働者の働いている場所について考えるために、表3-2の統計結果を見てみよう。第1次産業に限るが、1952年から1958年にかけて、農村の方が都市よりはるかに女性が働いている場であることが顕著である。

表3-1と3-2を合わせて考えてみると、1949年から1957年まで、都市での女性労働者の増加するスピードがとても速いことが見い出せる。しかし、第1次産業における女性労働者の割合は、農村の方が多くなっている。つまり、1949年から1958年にかけて、女性の就業率は高くなったが、主として農村で第1次産業に従事している割合が高く、したがって職業レベルを考えれば、低いと言わざるを得ない。

1995年の人口統計調査によれば、産業に従事している女性経済活動人口¹²⁾総数は32,017.5万人である。表4で3つの産業の領域における男女の比率を見ておきたい。そのうち、女性の経済活動人口の比率が最も多いのは第1次産業で、65%を占めており、第2次産業内では30%、第3次産業内では39%の割合を占めている¹³⁾。(第1次産業とは農業、林業、牧畜業、水産業など直接自然に働きかけるものをいう。第2次産業は製造業、建設業、鉱業、電気、ガス、水道供給事業などが含まれる。第3次産業は、第1次産業と第2次産業以外の産業で、金融業、運輸、通信業、商業、文化、教育、社会保障、社会福祉、飲食業、ホテル業、保険などが含まれる¹⁴⁾)。(資料：中国国家統計局2003年5月20日新華網の発表)

表4から見ると、1995年、女性労働者の比率が多いのは第1次産業である。つまり、女性の労働は主に農業・畜産業だと考えられる。

職業構造から見ると、中国の女性は、最初は多くが第1次産業に就業し、その後第3次産業に移行する。

表4 各産業別男女性経済活動人口比率

	男性経済活動人口の比率 (%)	女性経済活動人口の比率 (%)
第一次産業	35	65
第二次産業	70	30
第三次産業	61	39

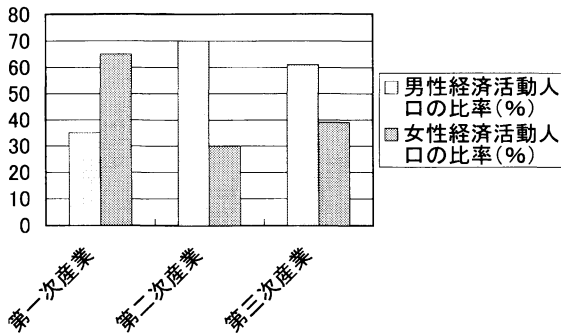


図4 各産業別男女性経済活動人口比率

(参考資料：労働社会保障部労働科学研究所、『2002年中国就業報告』より作成，中国労働社会保障出版社，2002年，103頁)

表5 第三次産業における女性の経済活動人口比率(2000)

業種の種類	女性経済活動人口(万)	女性経済活動人口比率(%)
金融、保険業	141.2	48.00
サービス業	210.4	46.00
衛生、スポーツ、社会福祉	278.2	58.40
不動産業	34.2	36.80
文化、芸術、映画・テレビ	689.3	46.00
人口総数・人口比率平均	1353.3	47.04

参考資料：労働社会保障部労働科学研究所、『2002年中国就業報告』より作成，中国労働社会保障出版社，2002年，103頁

この過程で、中国女性の就業の領域は広がってきて、最近では特に新しい産業への就業の割合が明らかに上昇している。表5によれば、2000年の10業種の女性の経済活動人口は比較的高い割合を占めている。金融、保険業の女性経済活動人口は141.2万人で、この業種の48.0%を占めている。サービス業の女性は210.4万人で、この業種の46.0%を占める。衛生、スポーツ、社会福祉事業に従事する女性は278.2万人で、この業種の58.4%を占めている。不動産業の女性は34.2万人で、この業種の経済活動人口の36.8%を占める。文化、芸術、映画・テレビ等の業種に就業する女性の数は689.3万人とかなり多く、この業種の46.0%を占めている¹⁵⁾。

表6 女性の責任者数の比率(1990)

	女性 (%)	男性 (%)
中央責任者	19	81
省責任者	10	90
地方責任者	11	89
県責任者	7	93
区、鎮、郷責任者	6	94

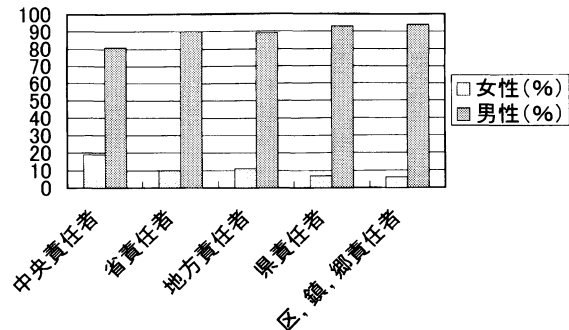


図5 女性の責任者数の比率(1990)

(参考資料：崔風垣、張琪、『婦女社会地位評価指標体系研究』より作成，中国婦人出版社，2003年，208頁)

次に社会的に高い地位を女性が得ているかどうかをみるために、責任者の比率を見てみよう。

表6にあるように、1990年、中国政府の職務担当者は、中央レベルの責任者のうち女性は19%を占め、省レベルの責任者では10%を占めていると発表した。さらに地方レベルでは11%、県の指導者の中では7%を占めており、区、鎮、郷レベルでは6%である。中国政府は強力に「男女平等」を提唱し、法律の上で女性にたくさん就業する機会を与えると宣言するが、やはり政府で責任者を担当する女性の数はまだ少ないのである。女性が政治に参加する状況を改善するためには、政策だけでは解決できない。それは、女性自身の能力の向上や女性が参加する政治の環境、あるいはマスコミの宣伝にかかっている¹⁶⁾。

すでに述べたように、女性の就業率は高いが、中国の女性の社会的な地位については問題が存在している。即ち、女性が就業できる職業のレベルは男性に比べて低く、「中国の女性は文化や教育の分野と政府機関ではたった30%を占める」¹⁷⁾に過ぎない。

以上の各種のデータから見ると、中国の女性は1949年以降、主に第1次産業を中核として働いてきた。2000年の時点では、女性は第3次産業に徒事する人数が増加している。経済発展のために、女性は社会での労働に参加する人数を増加したが、高い地位につく人たちはまだまだ少ないので、現実には、実質的に「男女平

等」が、実現しているとは言い難い。

第二章 職場・家庭が与えるストレス

第一節 職場とストレス

1 就業環境

まず、中国女性の就業環境と就業の特徴を歴史的に分析する。

中国では、女性の就業は中国の歴史的、社会的現実と不可分である。1949年以前、中国の女性の社会的地位は低く、社会は女性の就業に対しては否定的態度を持っており、女性の就業環境は劣悪であった。

第1章でも述べたように、1949年以後、中華人民共和国社会主義制度の確立により、女性には男性と平等な就業の権利が付与されただけでなく、男性と同等の就業環境が提供されることが、法律で保障された。現在中国の女性の間では就業環境の改善に伴って、自己実現を目指す傾向がある。しかし、政治及び経済活動は、改革開放の波が到来して以降、女性の就業環境に多大の影響を及ぼした。まず改革開放を境として、経済は1980年代の初めから発展した。改革開放の出発点は、1978年12月に開かれた中国共産党第11期中央委員会第3回総会(三中全会)である。そこで、これまでの「伝統的、閉鎖的、高度集中的な計画経済体制を改革し、全面的な開放をすすめる中で社会主義市場経済体制を建設し、経済効率優先の原則によって生産力を発展させる」¹⁸ことが決定された。経済発展は女性に一層多くの就業の機会を創出することとなり、就業の領域を広げ、女性の社会経済的地位の向上のために多くの機会を提供することとなった。その結果、社会生産労働に参加することは、男女の社会的地位の平等を実現する上で法律的な基盤を提供し、女性には広大な自己実現への重要な道を準備したのである。

しかし、就業における性差別は見落とすことのできない重要な問題である。経済体制の改革が進行するに伴い、就業にも計画分配から市場競争原理が導入された。さらに政経分離により、企業は自己責任をもつ独立経営体として利潤追求が最大の目標となったのも必然的なことである。

市場経済は女性に、男性とまったく平等に市場競争にさらされることを要求する。とくにある程度の社会的地位についている女性たちは、成果をあげるために、しばしば男性よりももっと犠牲を払って仕事をしなければならない。伝統的な社会が期待する「男は

外、女は内」という分業の枠組が残存したまま、社会的労働を行うには「『家』は大忙しの主戦場」¹⁹で、そこで休息できるのは男性だけである。そのような女性の高負担は、女性の社会進出にブレーキをかける事態をひきおこしているが、それについては、後述することにして、まずは、就職機会の不平等について考察したい。

2 就業の機会

改革開放以来、女性の就業問題は男性のそれより際立っている。

2003年に北京の大学生が求職するに際して、調査された企業の中で、56%の企業が男子大学生のみを募集するとしているのに対して、女子大学生のみを募集するのはわずか4%であった。男女大学生のいずれも募集するという企業の34%と合わせて女子大学生を募集の枠に入れているのは38%の企業しかなく、男子大学生の90%との差はとて大きい²⁰。表7から、企業は女子の採用に積極的でないことが明らかであると考えられる。

また同じ年に行われた大学生の就業状況に関する調査から、次のようなことが分かった。女子大学生は就職しにくいと思うかという設問について、そう思うという回答の比率が高かったのである。

表8から見ると、女子大学生は就職するのが困難だとみなす人々が多い。女子大学生が就職しにくいことに同意した女性は「全くそう思う」と回答したのが569

表7 2003年北京大学生求職調査

	調査された企業 (%)
男子大学生のみを募集する	56
女子大学生のみを募集する	4
男女大学生のいずれも募集する	34
不明回答	6

調査された企業 (%)

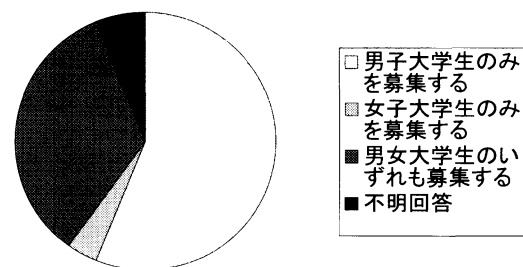


図6 2003年北京大学生求職調査
(参考資料: 孟憲范, 『転型社会中国的婦女』より作成, 中国社会科学出版社, 2004年, 75頁)

表8 女子大学生の就職の難易度についての意識

	男女 総数 (人)	男性回答者数 (人) (男性の中 での比率)	女性回答者数 (人) (女性の中 での比率)	不明 回答
全くそうは思わない	129	99 (8.2%)	29 (3.0%)	1
そうは思わない	185	134 (11.6%)	51 (5.2%)	0
どちらでもない	470	375 (30.9%)	93 (9.6%)	2
そう思う	566	334 (27.6%)	225 (23.3%)	7
全くそう思う	840	269 (22.3%)	569 (58.9%)	2
合計	2190	1211 (100%)	967 (100%)	12

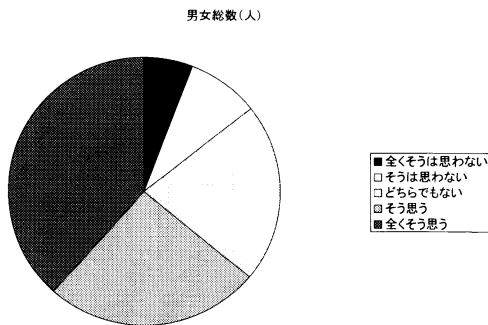


図7 女子大学生の就職の難易度についての意識
 (参考資料：孟憲范、『転型社会中国的婦女』より作成、
 中国社会科学出版社、2004年、69頁)

人(女性の中の58%)で、「そう思う」の回答の225人も合わせると女性の中の82%までがそのような意識をもっている。男性は「どちらでもない」という回答が375人(男性の中の30%)と一番多く、「そう思う」の334人(男性の中の27%)と「全くそう思う」の269人と合わせてほぼ50%近い。女性ほど多くはないとしても、やはり女子大学生の就職が困難であることを認識している²¹⁾。

すでに述べたように、1949年以後、社会主義国である中国では、女性の解放は社会的労働への参加による経済的平等の達成を基盤とするという理念のもとに女性の就業が進められてきた。現代の中国の女性は多くの才能を持ち、仕事を興す意欲も抱き、自己実現の強い欲求をもつ人が増加している。しかし、社会はいろんなことを理由にして、女性を男性と対等の労働力とはみなさないのである。では次に、女性労働者にどんな境遇が待ち受けているかを述べたい。

3 職業女性の境遇——「婦女回家」論争

ここでは職業女性の基本的な考え方と境遇から、職業女性の困惑を分析する。

まず、社会が両性に対して異なった成功の条件と機会を与えることで、女性が社会で成功しようとする動

機を減退させてしまう結果になった。たとえば、社会において、男性の社会的地位は往々にして女性より高いが、これは男性の職業の社会的評価が女性より高いという伝統を反映したものである。中国の関連部門の統計によれば、中国の女性の多くは、農林漁業及び牧畜業、商業、サービス業、各種の専門技術労働に従事している。いくつかの部門では女性を担当部署へ配置する場合、職務能力や専門的な学識等に対して明らかに保守的態度をとり、彼女たちには往々にして男性と同等の成功の機会や条件を与えず、社会で競争する上で劣勢に立たせている。そして、彼女たちが才能と知恵を発揮するのを妨げているのである。

改革開放後、社会は仕事において特技を身につけた才能の豊かな女性を重視し始め、それ以前と比較すれば幅広く仕事の機会を提供するようになった。しかし、女性が一旦採用され、職場でいくら活躍していても、リストラの波が押し寄せれば、多くの企業ではまず女性、特に中年女性と妊娠の可能性の高い年齢層の女性を解雇などの対象とする。

ここで、女性に対して、社会的労働から締め出し、家庭に回帰させる動きが生じたことをとりあげておこう。これは「婦女回家」論争とよばれるもので、権威ある女性誌「中国婦女」に1988年の1年間にわたって議論された問題であった。その中で黎静の「私の出路はどこに」という投稿を見てみる²²⁾。37才の黎は大学卒の優れた既婚の有職女性であるが、工場に改革の波がおしよせたとき、経済効率を高めるために、余剰人員として、自宅待機者の1人にさせられてしまった。これを命じられた労働者の約90%は子どものいる女性であるという。

企業が経済効率を高めるという目標を達成するにあたって、自宅待機や解雇の対象になるのが女性であったのは、なぜだろうか。まず、1988年に「女性労働者労働保護規定」が公布されたことが大きい。どの程度その規定が守られているかは今問わないが、「90日間の産休、生後1年までの哺乳時間、妊娠・出産、哺乳期の賃金カットや解雇の禁止など」²³⁾が保護規定としてあげられており、企業からすれば、女性労働者は効率が悪いことになる。また、男性が失業すると、女性の失業よりも多くの社会不安を招きかねない。

女性の出産・育児についての社会的価値がまだ全体として肯定されていないことから、出産や育児に伴う費用も社会の負担だと考えられてはいない。そのため企業に女性差別という現象が現れるのである。女性に特有な生理機能は出産・育児という重責を引き受け、

女性労働者の出産・育児の行為は企業の合理化には不利益だとみなされ、そのため、女性労働者が出産休暇終了後に会社に行っても、すでに担当の職務がなくなっている場合も少なからずあり、解雇されることも往々にしてある。

各企業が独自の人事権を有し、女性への偏見による性差別がまだ存在するので、仕事の達成への期待と現実の間には大きな差があるのであるが、これは女性なら正視しなければならない現実である。経済改革の流れの中で、1980年代に焦点となったのが「労働力過剰」問題であったが、それによって、「女性は家庭に戻り、失業(農村から都会へ戻った)青年に場所をゆずろう」という主張が国家の指導者によってなされたり、また「女性が家庭に戻って家事に専念することは、社会での就業と同じく光栄で偉大なことである」と建国のときの理念と逆の主張がなされるようになった。そのような主張に対する議論の展開が先に述べた「婦女回家」論争である。女性の中にも、たとえば、文化大革命(1966~76)中に、過酷な労働にかり出され、疲れ切ったという女性から「解放はもうたくさん、少し休ませて」²⁴という意見も出されたが、大半の女性の意見を見ると、社会的労働は、金のためだけでなく、人間としての自立、社会とのつながりという観点から必要であり、価値があるというものであった。

90年代に入って、女性をめぐる状況は好転したわけではなく、女性の経済分野への進出はさらに難しくなっている。女性はひき続いて、就業難、昇進難、給料や待遇の悪さに苦しめられており、職業をもつ女性は、家庭役割と職業役割の二重の責任のゆえに、疲れ切っている。それを表現する決まり文句に以下のようなものがある。「妻であるのは疲れる、母であるのも疲れる、社会的地位を持った女であることはもっと疲れる」²⁵。

第二節 仕事と生活の矛盾

1 仕事と生活の矛盾の原因

職業女性にとっては、職場においては仕事上の悩みがあり、家庭においては家庭の問題がある。職場では女性は激しい競争にさらされ、家庭の中では、妻としての役割を果たすことを要求される。この種の二重のストレスが代わる代わる女性を襲ってくるので、女性の疲労困憊は深刻である。一部の知識女性は伝統的役割を演じたくなくて、子どもの教育は夫に委ねてしまう。職業女性として、彼女たちは熱心に仕事の成功を

目指し、自分の才気と能力が社会から認められることを渴望する。

中国は今日、一部の家庭では夫が家事の一部を担っているが、大部分の家庭で家事はやはり妻がする。とはいえ、「家事への参加度から見ると、中国男性は他の多くの国の男性よりずっと高い」²⁶とされていることをつけ加えておきたい。市場経済ではいかなる仕事も競争が激しく、専門的な知識が必要とされ、その上、社会の発展のスピードが早く、また知識の進歩のスピードも早いので、常に社会が進歩する歩調に注意を払っていないと時代遅れになる。これは誰にとっても一種の大きなストレスであり、家事に追われている職業女性にとってはなおさらそうである。社会的責任を果たすために、限りある時間と精力をより多く仕事に配分したら、家庭に配分する力が少なくなり、それによって女性自身も後ろめたく感じるようになる。というのは、現在の実情では、女性は社会より家庭の側から期待されているからである。家庭の方を軽んじ、仕事の方を重んじて、家庭が破壊されるかもしれないと心配している女性は多い。

競争が激化した近代的な社会では、人が成功を遂げるのは容易ではなく、まして女性が成功を遂げるのはさらに容易なことではない。女性は仕事のためにはどうしても男性より多くの努力を払わなければならない。このために必ず家庭矛盾を引き起こすのである。

婚姻と家庭は多くの人にとって重要である。しかし、人々は家庭においては女性の側の義務と責任をより強調する。伝統的な社会通念の影響を受け、それを踏襲するため、女性は婚姻生活においては従属的な地位に置かれている。家事労働の主要な部分を引き受ける者であると同時に、職場での責任を負担しながら、子どもを出産して養育することは女性の就業に対して、否定的な影響を生むことになった。

人から敬服されるような完璧な女性とは、仕事に成功した職業女性であり、また母として妻としての責任を果たした家庭婦人でもある。彼女たちにとって家庭は自らの人生の半分であり、仕事も自らの人生の半分であって、両者を合わせて一つの人生とすることが理想である。仕事と家庭の両方に、自分の居場所があり、どちらか一つが欠ければ、女性としての精彩がなくなる。この点は職業女性の共通の認識である。したがって、職業女性は「仕事で成功した女性と家庭での良妻賢母との結合」を目標とし、理想像として人格形成を追求している。この目標は、人間としての価値と女性としての価値をともに表現できる。このような仕

事と家庭の両立をこなす女性の人格は疑いもなく魅力的なものである。ところが、現実生活の中で両方がバランスよくできる女性はどれぐらいいるのであろうか。

時代の進歩と考え方の変化によって、才能のある女性が次第に認められるようになったが、では、自分より才能があり、成功している女性と結婚し、その威光の下で生活したいと思う男性はどれぐらいいるのであろうか。男性が自分自身仕事で成功したければしたいほど、仕事で成功した、あるいは、成功しそうな女性を選択したくないのである。たとえば、胡発雲は「独身女性の生活と意識」という論文で、次のように述べている。「数百年数千年来、数々の戯曲や小説に、一つの古い物語が語られている。女が危険を犯し、艱難辛苦に耐えて、男が都へ出て試験を受けるのを助ける。男は優秀な成績で科挙に合格し、もとの妻や愛人を捨て去ってしまう。／現在の新しい物語はこんなふうだ。女が博士号や修士号を取ったり、外国に留学したり・・・幸いにも第一線に出たりすると、男は彼女たちを捨て去る」²⁷⁾と。仕事に成功した男性にとっては仕事と家庭はうまくいくが、女性にとっては仕事の成功は家庭を犠牲にしてしまうことが多い。

以上のように、仕事と家庭は女性にとっては両立が困難で、重い二重負担は既婚の職業女性に緊張に満ちた日常生活を送らせている。仕事の成功と家庭の幸福を、本当に享受できる人は、精力と才能をともに持っているわずかな職業女性しかなく、他の多くの女性はやはりその矛盾に苦しんでいるのである。

2 両性の役割分業

ここで、上海の家庭における両性の役割分業を見てみよう。

表9を見ると、男性が炊飯、飯後洗い物、洗濯、子どもの世話、掃除に費やす時間は、それぞれ19%、25%、13%、12%、13%とかなり少なく、様々な家事の領域の主要な責任者は、まだまだ女性である²⁸⁾。

中国社会科学院における研究によれば、(1) 家事労働時間に対して最も重要な変数に影響を与えるのは勤務時間であるが、性別に分けて分析すると、女性の勤務時間が長くなればなるほど、家事労働時間はますます少なくなる。しかし、男性はたとえ勤務時間がより短くなっても、依然として家事労働時間がふえるわけではない、(2) 上海市区と近郊について既婚男女における家事労働時間のあり方に違いはない、(3) 女性の家事労働時間は夫の3倍ほどであるという結論であっ

表9 上海家庭における家事労働時間の男女比率

	妻 (%)	夫 (%)
炊飯	81	19
飯後洗い物	75	25
洗濯	87	13
子どもの世話	88	12
掃除	87	13

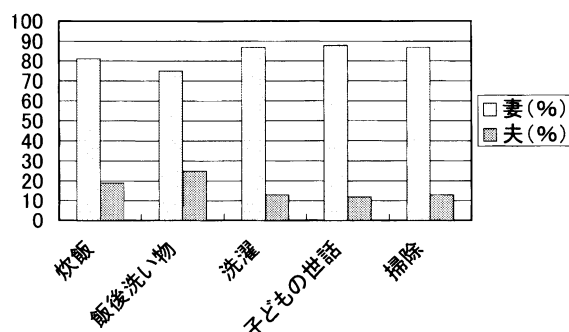


図8 上海家庭における家事労働時間の男女比率
(参考資料、孟憲范、『転型社会中国的婦女』より作成、中国社会科学出版社、2004年、236頁)

た²⁹⁾。

長い間に形成された観念は、まだ大きく変容はしていない。女性は夫と子どもに尽くすという責任を担わなければならないとされている。そして、現代の女性の側の社会的負担はどんどん重くなり、多くの職業女性が男性よりも長時間、家庭で働いている状態は改善されていない。

3 仕事と家庭の矛盾の結果

これらの仕事と家庭との矛盾は直接次の結果を引き起こしている。

一般的に、女性は25歳から40歳の間が生理面で出産に最も適した時期であることはすでに述べている。この時期に職業女性が受ける出産育児ストレスは主に夫婦両方の親から来るものであり、親たちは家族を継承するという伝統的思想により、孫を抱きたいとの要望が非常に強いが、若い夫婦は仕事を理由として、出産時期の繰り下げを選択する。これによって、親と若い夫婦の間に対立が生じる。特に、女性の方が、親たちからのストレスを大きく受けることが多い。

この時期に、職業女性は選択に迫られて、出産育児を選べば、母親としての楽しみを味わうことができるが、仕事に影響が出て、何年間もの努力が無に帰してしまう可能性がある。逆に仕事を選択すれば、家庭でのストレスが一層厳しく、かつて親からの圧力と共に抵抗してくれていた夫の方も立場を変えてしまう。こ

の段階の職業女性は人生の重大な苦境に立たされることになる。

《女性労働者労働保護規定》に公然と違反する企業は少ないが、法律や法規への違反を回避する措置を取って、職業女性の権利を侵すことは多い。たとえば労働契約を1年契約にしたり、いろいろな理由をつけて女性を辞職に追い込んだりする。女性が訴訟を起こしても、あるいは、仲裁を申請しても証拠の提出ができず、法律の保護を受けることが難しい。これは職業女性にとってはさらなるストレスで、とりわけ私企業では女性の保護はないに等しい。農村に乱立しだした個人経営の私企業がほとんどである郷鎮企業では、女性労働者の問題は非常に深刻で、「五期」(月経期、妊娠期、出産期、授乳期、更年期)の労働保護を全く受けられない³⁾。女性労働者の出産問題については、雇い主はそれを当然のように私的事柄とし、引き続き就労できない以上、給与は支給できないとした。このため、女性労働者が出産することは失業を意味したのである。

現在30歳前後で、外資系企業に勤めている女性たちは、部門の責任者や主管を勤めているが、子どもを出産した人は非常に少ない。いったん子どもを出産すると、必ず将来の仕事に影響し、また忙しい生活では子どもを育てる精力が充分にない。このように出産計画に影響を受けるのは外資系企業に限らず、すべての職業女性が直面している共通した問題であるといえよう。

大学を卒業して就職しようとするれば、すでに述べたように多くの企業は男性しか採用せず、女性は全く相手にされないし、女性が採用されても、五年以内に出産してはいけないなどの不平等な条件が付いている。出産休暇が終わり、会社に出勤しようとしても、解雇や自宅待機を命じられてしまうことが多い。

以上は職業女性の出産育児時期の先送りによる社会問題を分析したが、女性が出産自体を拒めば、さらに多くの社会問題を起こす。出産時期の先送りだけでも、すでに親から反対されるのであるが、出産を拒むならさらなる反対を招くのは十分に理解できるであろう。夫婦の仲がよくても、妻の方が子どもを生みたくなく、親から反対されて、結局訴訟を起こし、離婚したというような例は周りにはよくあることであろう。また伝統的思想により、出産したことのない女性に対して理解を示さない態度を取り、奇異な目で見、大きな社会的ストレスを与える傾向もまだ残存している。

第三章 結 論

1949年の後、中国の女性は法律の上で権利と自由を獲得し、社会活動に参加し、地位が改善された。しかし、「男女平等」を実現の社会でどのように達成するかは難しいことである。1980年代の後半から、都市の経済の規模は巨大化した。1978年、中国共産党が改革開放、経済活性化の路線を決定したことはすでに述べたが、都市での経済発展の前に、まず農村での大きな変化があった。70年代末から80年代初めにかけて農民がやり始め、後に政府に認められて広まった「家庭請負責任制度」¹⁾が農村の生産経営方式を集団経営から家族経営へ転換させ、農村の利益構造に変化をもたらした。努力すればそれだけ農家の利益がふえることによって、農民の生産意欲が刺激され、生産効率が大幅に上がることになった。ここで、結果したのが大量の余剰労働力である。

建国後30年間、土地にしばりつけられてきた農民は、市場経済の導入後、建設やサービス業などの急激な労働力需要もあって、都市に流入する。戸籍制度により農民の身分から都市住民の身分に変わることは困難であるので、都市住民として生涯を終えることは少ないが、大量の農村人口が都市に流入したことは事実である。

都市では利潤を最大化することを目ざして経営の合理化が始まり、「婦女回家」論争で見たように、男性に職をゆずるために女性が失業に至る光景があちこちで見られた。女性たちは自宅待機や解雇をされないように、男性以上に職場で一生涯懸命になって働く。中国経済の発展に大きな貢献をしながら、実を結んだ果実の分け前を与えられない女性の現実。かつて、資本主義国に先駆けて男女同一労働同一賃金の原則が打ち立てられ、女性労働者の保護規定が制定され、女性の社会的進出が華々しく喧伝され、明るい未来を展望していたはずの中国であったが、真の「男女平等」への道はまだ遠い。乗り越えるべき多くの壁はあるが、身近な地点—家事労働への男性の参加—から一歩ずつ前に進んでいくべきではないだろうか。

注

- 1) パートタイムは公務員以外の従業員の就業形態をさす。
- 2) 資料は、中国全国婦人联合会2004年10月11日中国婦女網〔中国政府のウェブサイト〕による
- 3) 「封建制度」とは、①天子の下に、多くの諸侯が土地を領有し、諸侯が各自領内の政治の全権を握る国家

- 組織。中国周代に行われた。②封建社会の政治制度。領主が家臣に封土を給付し、代わりに軍役の義務を課する主従関係を中核とする。(《広辞苑》の定義による)
- 4) 周代は紀元前 1066 年から紀元前 221 年まで中国の華中を治めた。
- 5) 中国漢の時代、董仲舒がこの言葉を『三綱五常』に載せている。
- 6) 崔風垣、張琪、『婦女社会地位評価指標体系研究』、中国婦人出版社、2003 年、104 頁
- 7) 同上、112 頁
- 8) 譚深、前山加奈子訳、「経済改革と女性問題」、秋山洋子、江上幸子、田畑佐和子、前山加奈子編訳、『中国の女性学—平等幻想に挑む—』、勁草書房、1998 年、57 頁
- 9) 同上、59 頁
- 10) 都市就業者は、正規の雇用関係にある有給雇用者をさす。
- 11) 杜芳琴、王向賢、『婦女與社会性別研究在中国 1987—2003』、天津人民出版社、2003 年、345 頁
- 12) 経済活動人口は労働供給を行うすべての人口をさす。
- 13) 労働社会保障部労働科学研究所、『2002 年中国就業報告』、中国労働社会保障出版社、2002 年、103 頁
- 14) 資料は、中国国家统计局 2003 年 5 月 20 日新華網 [中国政府のウェブサイト] による
- 15) 労働社会保障部労働科学研究所、前掲書、103 頁
- 16) 崔風垣、張琪、前掲書、208 頁
- 17) 同上、202 頁
- 18) 楊志、秋山洋子訳、「現代中国女性の役割矛盾」、秋山洋子、江上幸子、田畑佐和子、前山加奈子編訳、前掲書、78 頁
- 19) 譚深、前掲論文、83 頁
- 20) 孟憲范、『轉型社会中国的婦女』、中国社会科学出版社、2004 年、75 頁
- 21) 同上、69 頁
- 22) 黎静、「私の出路はどこに」、秋山洋子編訳、『中国女性—家・仕事・性』、東方書店、1991 年、145 頁～152 頁
- 23) 同上、144 頁
- 24) 秋山洋子編訳、前掲書、143 頁
- 25) 秋山洋子、江上幸子、田畑佐和子、前山加奈子編訳、前掲書、80 頁
- 26) 譚深、前掲論文、61 頁
- 27) 胡發雲、「独身女性の生活と意識」、秋山洋子編訳、前掲書、105 頁
- 28) 孟憲范、前掲書、236 頁
- 29) 同上、238 頁
- 30) 唐敏、「中国女性労働者解放の表面と実質」、秋山洋子編訳、前掲書、185 頁
- 31) これは 1985 年に公式のものとされた。(秋山洋子、江上幸子、田畑佐和子、前山加奈子編訳、前掲書、130 頁)
- 国の女性学—平等幻想に挑む—』、勁草書房、1998 年
- 秋山洋子編訳、『中国女性—家・仕事・性』、東方書店、1991 年
- 榮維毅、宋美妮、『反对針對婦人的家庭暴力』、中国社会科学出版社、2002 年
- 榮維毅、黃列、『家庭暴力对策研究与干預』、中国社会科学出版社、2003 年
- いのうえせつこ、『女性への暴力』、新評論、2001 年
- 石原邦雄、『現在中国家族の変容と適応戦略』、ナカニシヤ出版、2004 年
- 王紅旗、『中国女性在行动』、中国時代經濟出版社、2003 年
- 、『中国女性在対話』、中国時代經濟出版社、2003 年
- 、『中国女性在演説』、中国時代經濟出版社、2003 年
- 、『中国女性在追夢』、中国時代經濟出版社、2003 年
- 、『中国女性文化 NO.3』、中国文聯出版社、2003 年
- 、『中国女性文化 NO.4』、中国文聯出版社、2004 年
- 王恩銘、『二十世紀美国婦女研究』、上海外語教育出版社、2002 年
- 岡本祐子、『女性の生涯発達とアイデンティティー個としての発達・かかわりの中での成熟—』、北大路書房、1999 年
- 郭愛妹、『家庭暴力』、中国工人出版社、2000 年
- 郭慶松、『中国城郷就業發展戰略研究 (2001—2010)』、上海人民出版社、2004 年
- 窪田幸子『社会変容と女性』、ナカニシヤ出版、1999 年
- 瑜苑、『压力—誰没压力誰不煩』、地震出版社、2002 年
- 荒林、『中国女性主義. 2004 春』、広西師範大学出版社、2004 年
- 、『中国女性主義. 2004 秋』、広西師範大学出版社、2004 年
- 、『两性視野』、知識出版社、2004 年
- 崔風垣、張琪、『婦女社会地位評価指標体系研究』、中国婦人出版社、2003 年
- 朱易安、柏樺、『女性與社会性別』、上海教育出版社、2003 年
- 朱德成、『女人不要苛求』、中国文聯出版社、2004 年
- 尚仲生、『当代中国社会問題透視』、湖北人民出版社、2002 年
- 潘默、『商界女贏家』、中国商業出版社、2002 年
- 肖可、『解讀中国女老板』、中国經濟出版社、2003 年
- 白水紀子、『中国女性の 20 世紀』、明石書店、2001 年
- 戴文妍、『近看女人的 100 個問題』、上海社会科学院出版社、2004 年
- 張克儉、賈玲、「当代女大学生撰業と女性平等就業の調査與研究』、『中華女子学院山東分院学报—調查與思考—』(2003 年 2 期)、中華女子学院山東分院学报、2003 年
- 張向東、『当代社会問題』、中国審計出版社、中国社会科学出版社、2001 年
- 趙学林、『抑鬱病・都市人』、經濟日報出版社、2001 年
- 、『再婚家庭狀況調查』、經濟日報出版社、2002 年

参考文献

秋山洋子、江上幸子、田畑佐和子、前山加奈子編訳、『中

- 陳方,『失落与追尋—世紀之交中国女性價值觀的变化』,中国社会科学出版社,2003年
 中国全国婦人聯合会中国婦女网 <http://www.women.org.cn/index.html>,2004年10月11日
 中国国家統計局新華网 <http://news.xinhuanet.com/zhengfu/>,2003年5月20日
 鄭偉志,夏玲英,『女性與家庭』,上海教育出版社,2003年
 丁文,『家庭学』,山東人民出版社,1997年
 杜芳琴,王向賢,『婦女與社会性別研究在中国1987—2003』,天津人民出版社,2003年
 杜学元,『中国女子教育通史』,貴州教育出版社,1995年
 杜成憲,丁綱,『20世紀中国教育的現代化研究』,上海教育出版社,2004年
 杜芳琴,王政,『中国歷史中的婦女與性別』,天津人民出版社,2004年
 —————,『社会性別』(第一輯),天津人民出版社,2004年
 杜芳琴,『婦女学和婦女史的本探索』,天津人民出版社,2002年
 友田尋子,安森由美,山崎祐美子,『知っていますか?女性とストレス—問—答』,解放出版社,2001年
 汝信,陸学芸,李培林,『2004年:中国社会形勢分析與予測』,社会科学文献出版社,2004年
 潘懋元,鄒大光,張亞群,『高等教育百年』,廣東教育出版社,2003年
 潘晨光,王力,『中国人材發展報告 NO. 1』,社会科学文献出版社,2004年
 胡浩,『論国际直接投資对發展中国家婦人就業的影響』,『婦女研究』,中国人民大学書報資料中心,2004年第1期
 孟憲范,『轉型社会中国的婦女』,中国社会科学出版社,2004年
 落合良行,『孤独な心—淋しい孤独感から明るい孤独感へ—』,サイエンス社,1999年
 落合惠美子,『21世紀家族へ』,有斐閣,1994年
 樂銖,『中国現代女性創作及其社会性別』,鄭州大学出版社,2002年
 李銀河,『女性權力的崛起』,文化芸術出版社,2003年
 ———,『酷兒理論』,文化芸術出版社,2003年
 ———,『女性權力的崛起』,文化芸術出版社,2003年
 ———,『性文化研究報告』,江蘇人民出版社,2003年
 ———,『生育與村落文化—爺之孫』,文化芸術出版社,2003年
 李小江,『文化,教育與性別—本土經驗與学科建設』,江蘇人民出版社,2002年
 林聚任,『社会性別的多角度透視』,羊城晚報出版社,2003年
 陸建華,『中国社会問題報告』,石油工業出版社,2002年
 劉繼同,『社区就業與社区福利』,社会科学文献出版社,2003年
 勞働社会保障部勞働科学研究所,『2002年中国就業報告』,中国勞働社会保障出版社,2002年
 呂建国,孟慧,『職業心理学』,東北財經大学出版社,2000年